

磯田幸子さんを悼む

磯田さんが、当時麻布飯倉にあった東大理学部天文学教室に来たのは太平洋戦争が敗戦に終わった一年くらい前からのことではなかったであろうか。なんでも家にいると軍需工場へ徴用されるところで、東京天文台のはじめは多分臨時職員として、天文台を兼務していた萩原雄祐先生の戦時研究かなにかを手伝う秘書の仕事をしていたのではないだろうか（古在さんによると、事実は多少ちがうとのこと）。お茶の水をトップで出た才媛という噂であったが、敗戦後しばらくして、焼け跡のバラック建ての天文学教室事務室勤務となり、やがて天文学教室ともども本郷にうつり、いまから十数年まえに文部技官を定年になられた。しかし、それからもついせんだって亡くなる一月ほどまえまでの五十年間の長きにわたってずっと天文学教室のお守を勤めてこられた次第であった。絶えず物静かで謙遜でこやかでサービス精神にとみ、修道女のようなじみな服装でいわば限りなく聖女に近い生活であった。生涯独身であったが、つき合いのあったすべての人々に尊敬され慕われた一生であった。

あまり知られていないが、磯田さんはまた果敢の人であった。アマチュア無線局がまだそう多くなかった時代に、ある日突然アンテナを庭にたてることを申し出て家人を驚かせたそうである。女性のハムは極めて少なくCQCQのコールサインに応答が沢山あったところり打ち明けてくれた事もあった。最近では、さる有名な書道の展覧会に見事入賞し、そのまえから書家としての腕を磨いていたとかで、これは長く一緒に仕事をしてき



た本木たい子さんに見破られるまで天文の人は誰も知らなかった事実であった。

そんな訳で、東大天文学教室にはいつも磯田さんがいると皆がきめこんで慣れっこになっていたのに、突然磯田さんがいなくなりました。昔に比べればいくらか体力は衰えているようではあったが、まだまだお元気で、最近でも萩原先生の残された書類や資料の整理を精力的にやって居られるように見受けられた。萩原先生の字をまともに読める人は他にいないので、何としてでもやり遂げておこうという責任感で働いて居られたのかも知れない。天文学の論文を書いたわけではないが、磯田さんの天文学に貢献した無形の寄与は絶大なものがあったと思う。こうした無形の貢献は時代が変わればだんだんに忘れられていく事であろうが、こんな見事な人生を送った人が身近にいたことを私たちは幸に思わなくてはならないのではなかろうか。つつしんで磯田さんの御冥福をお祈りする。

海野和三郎（近畿大生物理工学部）

